

17. Суровень Д.А. Развитие Японии в конце IV – начале V вв.//Уральское востоковедение: Международный альманах. Екатеринбург: Изд-во Урал. ун-та, 2005. Вып. 1. С. 8-45.
18. Ямао Юкихиса 山尾幸久. Нихон кодай ѓкэн-кэйсэй сирон 日本古代王権形成史論. Токио 東京: Иванами-сётэн 岩波書店, 1983. – 486, 15 с.
19. ЯРС – Японско-русский словарь. М.: Русск. яз., 1984. – 696 с.
20. The Cambridge history of Japan: Ancient Japan. Cambridge-New York: Cambridge University Press, 1993. Vol. 1. – 602 p.

Табада Л.Ч.

ФГБОУ ВПО «Московский государственный лингвистический университет»

Евразийский лингвистический институт, филиал МГЛУ в г. Иркутске

СРАВНЕНИЕ КУЛЬТУР НА МАТЕРИАЛЕ ПОСЛОВИЦ – ЯПОНИЯ И ФИЛИППИНЫ

В настоящей статье проводится сравнительный анализ японских и филиппинских пословиц и рассматриваются сходства и различия таких культурных аспектов, как отношения между родителями и детьми, а также сыновний долг.

Ключевые слова: сравнительно-культурный анализ, Япония, Филиппины, отношения между родителями и детьми, сыновний долг.

Tabada L. (Irkutsk)

MOSCOW STATE LINGUISTIC UNIVERSITY

EURASIAN LINGUISTIC INSTITUTE

COMPARISON OF CULTURES ON THE MATERIAL OF PROVERBS – JA- PAN AND PHILIPPINES

The article presents a comparative analysis of Japanese and Filipino proverbs considering similarities and differences of such cultural aspects as the parents-children relationships and the filial duty.

Keywords: comparative cultural analysis, Japan, Philippines, parents-children relationships, filial duty.

ことわざによる比較文化 <日本とフィリピン>

本稿では、日本とフィリピンのことわざの比較分析を行い、両国における親子関係ならびに親孝行という文化的側面の類似点・相違点を考察する。

キーワード: 比較文化、日本、フィリピン、親子関係、親孝行。

ことわざには、古くからの民衆の知恵を表現した言葉のわざである、または良い人生を送るための短い有効な教訓であるなどと、様々な意味付けがなされてきた。言葉の機能としても、人を批評し、会話を面白くし、相手の心に対する慰めや励ましの言葉となるなど、多様である。時と場合によっては相手を笑わせ、また逆に傷つけることにもなるというように、その意味は幅広い。また、ことわざには現代社会が反映されているほか、ことわざによって、文化や思想など理解でき、ことわざに触れて人生をどう言う風に歩むべきか、人としての生き方を学ぶこともでき、とても面白く思われる。また、外山滋比古[外山, 2002, p. 345]によると、「ことわざは庶民の生活経験の結晶である。本に書いてある知識とは類を異にする。伝説的知恵であり、前近代的ある。学校教育が問題にしないのは当然で、ことわざが教科書にのることもない。社会へ出て生活の複雑さにおどろいて、はじめてことわざの知恵に目をひらかれる」。

ことわざには色々なことが表現されているが、本稿では人間関係について、具体的に言えば、子供の教育、そして親孝行という課題に限ることとし、日本とフィリピンのことわざを通してそれぞれの国の文化や思想を比較させて行きたいと思う。

フィリピン共和国は 7,000 余の島から成り、そのうち約 100 の島に人が住んでいる。農業国で、自然条件に恵まれ、動植物や魚介類は種類も量も豊富である。大島国である上に、歴史的条件も加わって、他言語国家を形成し、言語間の差異も大きい。オーストロネシア語族の属する言語であり、母語として多数の話者を持つ言語はタガログ語 (Tagalog)、セブアノ語 (Cebuano)、イロカノ語 (Ilocano)、ヒリガイノン語 (Hiligaynon)、ビコル語 (Bicol)、サマル・レイテ語 (Samar-Leyte)、カパンパンガン語 (Kapampangan)、パンガシナン語 (Pangasinan) で、その話者の総数はフィリピン総人口の約 90% を占める。

1 親子関係

ことわざを通して考えると、フィリピンでは美德と教訓よりもまず両親に対する尊敬が重視されていることがわかる。フィリピンの社会では、家族が一つの基本的単位であり、社会に大きな影響を及ぼしている。そのため、結婚と家族生活の理想を表すことわざがたくさんある。しかし、この本稿では家族に関することわざ全てを扱うことはせずに、親子の問題にしばることとした。その中で、まず、子供の教育に関することわざを取り上げる。

親は子供に行儀を教え込まざるを得ない。なぜかという、まず、第一に、人の両親ほど好適な教育者はいないからである。子供に対して最も深い愛情を抱いているのが両親であるし、親としての責任もある。第二には、子供の教育は若木を好みの形に仕立てるように早ければ早いほどいい。子供が最初に接する人間が親であり、教育も初めが肝心だと考えられるからである。

フィリピンには次のようにリズムカルなことわざがたくさんある。

(1) Ang kahuy na liko't baluktot, hutukin hanggang malambot.

Kung lumaki at tumayog, mahirap na ang paghutok. (Tagalog, #1384)

湾曲した木は若いうちに伸ばさないと、成木になったら難しい。

要するに、子供は小さい時に厳しくしつける方が良く、時期を逃せば効果がなくなるということである。

フィリピンの場合は子供のお尻を軽くたたくことは、躰けるための一つの方法である。例えば、

(2) Anak na di paluin, ina ang paluluhain. (Tagalog, #186)

子供をたたかないと、将来母が泣くことになる。

(3) Anak na palayawin, ina ang patatangisin. (Tagalog, #190)

子供を甘やかすと、将来母が泣くことになる。

小さい子供には、理屈を言って聞かせてもわからない。良くないことをした時に、子供に体で覚えさせるため、軽くたたく。そうしなかったら、子供には善悪がわからないと思われる。悪善がわからないまま育つと、将来母が泣くことになる。(3)のことわざは(2)のことわざとは逆に、子供を甘やかすと、将来母の重荷になることを述べている。次のことわざは、子供が悪いことをした時には子供を泣かせても厳しく叱らなければならないということ述べている。

(4) Anak na pinaluluha, kayamanan sa pagtanda. (Tagalog, #185)

子供を泣かせれば、その子は将来親の宝となる。

以上のことわざをよく見ると、(4)では「親の宝」なのだ。(2)と(3)の場合は、母だけの重荷になると言われることに気づく。子供を躾けるのはもともと母親の責任なのだとな一般的には考えられているようである。それから、子供が立派な人間に育たなかった場合は、母親が責められることも多い。

更に、フィリピンでは子供の躾を真剣にやっており、マナー、行儀が良ければ、財産がなくても十分だと思われている。貧しい人は、子に良い教育さえ遣らせば、それこそ財産である。次のようなことわざがある。

(5) Di man magmana ng ari, magmamana ng ugali. (Tagalog, #1457)

行儀を子供に遣らせば富は要らない。

それから、次のことわざは、子供を甘やかすへの戒めである。

(6) Ang anak ay malunod man, di sagipin ng magulang.

Takot na baka masaktan. (Tagalog, #192)

甘い親は我が子が溺れても、怪我させるのを恐れて、救わない。

子供が悪いことをした時に、注意することで子供に嫌われ家を飛び出されてしまうことを恐れた親が子供を叱ることが出来ないという意味のことわざで、叱らないで甘やかす親のことを言っている。

日本の場合は、次のようなことわざがある。

(7) 矯めるなら若木のうち

枝振りの曲がっている木を直そうと思えば、柔らかい若木のうちにやらなければ、うまくいかないという意味である。例えば、人間も、悪い癖や習慣を直して正しく形成させようとするなら、柔軟性のある幼少時が良い。なぜかという、成長してからでは、遅いのである。つまり、子供の教育は小さい時ほど厳格にしなくてはならない。そして、成長してからは、自主性に任せるようにする方が良い。

歴史的にみると、昔の日本では、小児死亡率が高くて死ぬ幼子が多いためか、次のことわざがある。

(8) 七歳までは神のうち

このことわざは古くからの民間信仰に根ざしていた。もともと人間は生まれてからの数年間はまだ人間の子ではなく、神の域にあると考えられていたため子供を厳しく躾けなかった。

それから、子供はどうやって育つのか。

(9) 子供は親の背中をみて育つ

このことわざに表されているように、子供を悪から守るだけという消極的教育では不十分である。子供は小さい時には、親のすることを真似するから、子供に説教するより、言行一致で親自身が手本となり、実行した方が良い。

また、これに関しては次のようなことわざがある。

(10) 子供は大人の鏡

子供は大人の姿や生き方を反映するから、特に親が子供を鏡として生きてゆかなければいけない。子供は日々の生活の中で親や大人の真似をし、大人に影響されながら成長してゆくものである。姿と顔の形だけでなく、性格と気質も親に似ることがあるから、親は子を育てる時、環境も影響を与えるのだから、時には子供は親の考え方の相似形となっても不思議ではない。更に、大人は子供の手本にならなくてははいけない。日本では特に、子は親を見本として成長すべきものだと考えられているので、「親に似ぬ子は鬼子」、「親に似ない子は芋の子」のように親に似ないような子は人間の子ではないとさえ決めつけている。

そして、子供がもっと大きくなったら、このようなことわざがある。

(11) 可愛い子には旅（させよ）

「旅は憂いもの辛いもの」というように、昔の旅は苦しいものであったことから、このように言われる。子を愛するなら、手元に置いて甘やかさず、世の中の辛さを経験させるのが良いという意味なのである。つまり、愛する子は厳しく育てよと言っている。ところが、昔は大変な苦勞を伴うものであった旅も、現代では楽しいものになった。このことわざにも卒業旅行に親がお金を出しているというような誤った解釈が生まれている。

上記に述べられたように、親に育てられた子供が親に似ることになるのも当然である。このようなことわざは、日比ともに非常に多い。

日本のことわざでは、とても有名なのは次のものである。

(12) 「蛙の子は蛙」

オタマジャクシには尾があり、一見親と違う、魚のようであり、似ても似つかない。しかし、成長するにつれて尾が取れ、結果的に親と似た蛙になる。初めは親に似ていないもの

がそのうちには似るようになるという意味が裏に隠されている。ということは、子はいつの間にか親に似るのである。また、子は親の進んだ道を歩ということのたとえもある。全く正反対の意味のことわざはないようである。これと似ていることわざが「瓜の蔓に茄子はならぬ」、それから「鳶の子鷹にならず」であり、血筋は争えず、非凡な子は平凡な親からは産まれないと考えられている。上に書いてある日本のことわざに対して、意味が似ているフィリピンのことわざは下記のようなものである。

(13) Kung ano ang puno, siya ang bunga. (Tagalog, #1380)

この木にして、この実あり。

(14) Ang santol ay di mamumunga ng bayabas. (Tagalog, #1381)

サントル木はバヤバスの実をつけない。

(15) Con an puno bayabas, dili magbunga sing capayas. (ilongo, #1382)

バヤバス木ならば、パパイヤの実をつけない。

(16) Kon ano an ama, iyo man ang aki. (Bicol, #416)

この父にして、この子あり。

しかし、平凡な両親から優れた子供が生まれることもあるようで、そういう場合は次のことわざで表現されている。

(17) 「鳶が鷹を生む」

鳶と鷹は同じ仲間であらうが本質的には違う。その鳶が鋭い強さを持った鷹を生む、というのは、時として平凡な親が、親には全く似ていない非凡な才能を持った子供を生むこともあるというたとえである。

また、竹の子の生長が早いところから、親より優れていることを竹の子に例える。

(18) 「竹の子親勝り」 (筍親勝り)

現代の子供達は、たいてい親より大きくなるので、まさにこの通りであろう。親子は似ているというが正反対になることもあり、それを「親の黒きは子が白し」とか「烏の白糞」という。

2 親孝行

フィリピンでは子供は親を尊敬するように育てる。このことを強調することわざは次のようなものがある。

(19) Aula in tuhan, apa in ina' an ama'. (Tausug, #560)

神様は全ての上に、その次に両親。

このことわざでは、神様に次に重要なものが両親だとされている。

それから、親を最も大事な宝物として大切にしなければならないということは次のことわざに表されている。

(20) Da amam ken ina, isudat' capatgan a gameng ti rabaw ti daga. (Ilocano, #418)

父母は地上で最も尊い宝石である。

そして、特に年を取って来ている親に対しては、こういうことわざがある。

(21) Da amam ken inam, pag-ibusan ida ti anus ken pigsam. (Ilocano, #419)

あなたの父母にあなたの全ての忍耐と力を捧げなさい。

ということは、色々な苦勞してくれた親にたいする私達の無条件の我慢や思いやりを尽くすという親孝行が大切だということある。

次に、親孝行に関する日本のことわざを見ることにしたい。

(22) 石に布団は着せられぬ

このことわざでは「石」は墓石のことである。つまり、石には「冷たさ」と「死者」、布団には「温かさ」と「いたわり」が込められている。親がしんでから孝行出来ないということである。孝行しようとしても遅いことのたとえである。だから、親孝行は親が生きているうちにしなければならない。

(23) 親孝行と火の用心は灰にならぬ前

要するに、父母が生きているうちに親孝行しなければ、意味がないし、火の用心も火を出してしまってからでは無駄だということである。

孝行があれば、もちろん不孝もある。子供が親より先に死ぬ場合がある。親より先に死ぬ子が不孝だと思われる。

(24) 親に先立つは不孝

なぜかという、子が先に死んだら親に悲しい思いをさせ、悲しませるから不孝である。

では、日本では親子に関係についてはどのように考えられているのか。

(25) 親は無くとも子は育つ

親をなくした子でも、どうにか成長して行くようにそれほど先を心配する必要はないという意味である。親だけでなく、社会や他人も子供の成長に影響するのである。

また、フィリピンでもよく言われている一つのことわざに、次のようなものがある。

(26) 子を持って知る親の恩

自分が親になってみて、初めて育ててくれた親のありがたさが分かるという意味である。フィリピンでは、子が悪いことばかりして、親に口答えし、よく親と喧嘩している子についてそのようにいわれている。そして、自分が親になり、自分の親がしてくれたことがだんだんわかってきて、子供の時親に心配させたことなどを後悔するよとよく言われている。また、親に対してしたことは自分が親になった時に、二倍になって返ってくると言われている。

でも、なぜ子供は勝手気ままに降り舞うのか。ぱっと浮かぶのは次のことわざである。

(27) 親の心子知らず

親は子に対して、親の気持ちなんかわかってくれない、子供は皆勝手であると考えがちである。親と子の間柄では、相手の気持ちを推し量ることは簡単ではなく、誤解、意見の相違などがよくある。親というものは、自分は何事も子供のためと考えていると思いがちである。しかし、子を思う親の深い気持ちを知らぬ子供が好きなことを勝手にしたり、逆に親を恨んだりする。親も人間だから傷つくこともあると子供はほとんど思わない。

そして、またよく知っているはずの親が、子供の考えや気持ちを分かっていないということもある。このことは次のことわざに表されている。

(28) 子の心親知らず

つまり、親はこの本当の心を知ることが出来ない。いつまでも幼い子供だと思っている親にはどんどん成長していく子の気持ちは理解出来ないということしばしばある。

終わりに

親孝行、子供の教育、それから社会の中での人間関係についてのことわざはまだまだたくさんある。本稿を書いた時点で気づいた問題点がいくつかある。まず、比較した両国は島国で様々な地域にそれぞれのことわざもある。ことわざは庶民の知恵であるから、生活によって出てくることわざが違う。また、表現は違っていてもフィリピンと日本に共通の

価値観を表すことわざも多い。更に、ことわざの意味の面で、時代と場合によって変化するものがある。例えば、“A rolling stone gathers no moss.”（転石苔を生せず）というイギリスで生まれたことわざはアメリカに渡って意味が逆転した。イギリスでは苔（moss）とは、金のことであり、住まいや職業を転々とするような人間に金は貯まらない、の意味で使われた。アメリカではこのことわざを逆にとっているようで、優秀な人間なら需要があるわけであり、席の暖まる暇もなく動き回る。苔のような汚いものが付着する暇もなく、いつもこういう人はピカピカ輝いている。つまり、イギリスでは否定的に解されるローリング・ストーンのことわざが、アメリカでは素晴らしい人間を指すようになった。これによって、ことわざの意味が絶対不動のものでないことがわかる。最後に、矛盾していることわざもある。「鳶の子鷹にならず」という日本のことわざがありながら、「鳶が鷹を生む」のことわざもある。

参考文献

1. 奥津、文夫. 日英ことわざの比較文化 [文章] / 奥津文夫. - 東京：大修館書店. - 2000.
2. 外山、滋比古. 外山滋比古著作集 1 修辭的殘像 [文章] / 外山滋比古. - 東京：みすず書房. - 2002.
3. 時田、昌瑞. 岩波ことわざ辞典 [文章] / 時田昌瑞. - 東京：岩波書店. - 2003.
4. 森、隆夫. ことわざ教育学 [文章] / 森隆夫、小宮山潔子. - 東京：チャイルド本社. - 1984.
5. 世界ことわざ辞典 [文章] / 柴田、谷川、矢川編. - 東京：大修館書店. - 1995.
6. Eugenio, Damiana L. Philippine Proverb Lore [Text] (Philippine Studies Series 15) / Damiana L. Eugenio // Philippine Social Sciences and Humanities Review 31 (3-4). - Quezon City: Philippine Folklore Society. - 1966.
7. Okada, Rokuo. Japanese Proverbs [Text] / Rokuo Okada. - Tokyo: Japan Travel Bureau. - 1963.